

JFA 第 34 回全日本 O-30 女子サッカー大会 参加報告書

北海道 2 級審判員 秋山心音

参加日時 2023 年 3 月 10 日(金)
2023 年 3 月 16 日(木)~3 月 19 日(日)
場所 時之栖スポーツセンター裾野グラウンド(静岡県裾野市)
参加者 1 級審判員：丸本明奈氏
2 級審判員：秋山心音・関川伽音・藤田ひなの・佐藤颯音・畑中あずさ・
友宗菜月・別府朋香
INS 山岸佐知子氏・浅井昭子氏・西野照美氏・鮎貝志保氏(WEB のみ)

10 日(金) 事前 WEB 研修会

- ◎自己紹介
- ◎大会要項・競技運営上の注意事項の確認 (INS 浅井氏)
- ◎大会に臨むにあたり (鮎貝氏)
 - ・競技規則 p.11 サッカーの「理念」と「精神」
 - ・フィールドに存在する 3 つのチーム
『勝敗を競い合い、見ている人に感動を届ける 2 つのチーム』
『2 つのチームを支える 3 つ目のチーム「レフェリーチーム」』
→安全・安心で快適、フェアな試合の実現へ向かう関係性
 - ・「レフェリー」の役割・存在
 - ・大会までの宿題
 - ① 迅速な負傷者対応
 - ② ポジショニングの柔軟性

16 日(木) 研修会(場所:クラブハウス) INS 山岸氏『try and error』

- ◎負傷者対応(特に頭部)…映像あり
 - 判断するのはドクターや各チームであり、審判員はあくまでその方々に素早く繋げるための役割。その場面でのベストな対応(笛の使い方・ジェスチャー・負傷者の所へ駆け寄るスピード・選手への声の掛け方等)について考え、緊急性を伝えるにはどうしたら良いのか討論した。
- ◎プレーの再開…映像あり
 - 接触により負傷者が出て、役員や担架を入れた際の事象を映像でみて、ファウルの有無や懲戒罰、その後の再開方法を全体で整理した。
- ◎ポジショニング
 - 角度をつけて争点の監視を行う目標を立てた。

17日(金) ①②I 次リーグ

① リトルスターズ vs FC楓昂 Lifelong (時之栖スポーツセンター裾野グラウンド C ピッチ)

11:30 Kick Off

結果: 0-6(0-3)(0-3)

R: 畑中あずさ A1: 秋山心音 A2: 中村仁 第4 審判: 時野拓一郎

担当 INS: 浅井昭子氏

<自分の振り返り>

今シーズン初のサッカーだったため、まずはオフサイドの監視の感覚を取り戻すことを意識して取り組んだ。しかしオフシーズンのブランクから自分自身のオフサイド判定に自信を持つことが出来ず、ベンチの声を気にしすぎてしまった。今後は、北海道という土地柄を言い訳にせず、オフシーズンであっても自分なりにサッカーの感覚を保てるよう取り組んでいきたい。

また、試合前打ち合わせで私が確認不足だったため、試合中主審がオフサイドのフラッグアップに気が付かず、展開が変わった場面で勝手に判断し旗を降ろしたことで、選手の混乱を招いてしまった。試合前に確認すべきだった。

<INS からのアドバイス>

オフサイドの判定に関しては、真横から見ることの出来る副審が一番見えているので自信を持つこと。

② 山口選抜 vs リトルスターズ (時之栖スポーツセンター裾野グラウンド A ピッチ)

15:00 Kick Off

結果: 0-6(0-3)(0-3)

R: 秋山心音 A1: 畑中あずさ

A2: 望月大幹 第4 審判: 海野勉

担当 INS: 西野照美氏

<自分の振り返り>



前半、オフサイドの部分で副審のフラッグアップがあったが、よく目を合わせ2人目の飛び出しも見ていたためキャンセルした。しかし選手は副審の旗の音で足を止めてしまった上、オフサイドを要求する声も多少上がった。笛が鳴るまでプレーを続けるよう主審の自分が声で促しても良かったのではと感じた場面であった。以降の同じような場面ではプレーを続けるよう声をかけ、改善を図ることが出来た。

後半、意図的ではなくアクシデント的なつまづかせるファウルが起こり、ファウルした選手が転倒した選手に謝罪する選手同士のコミュニケーションの場面があった。多少のコミュニケーションなら、と思いつきの展開を考え自分のポジションについて

が、クイックの意志がないと分かった時点で一度止めるべきだった。

<INS からのアドバイス>

全体を通して非常に良く走っていた。

ファウル後の選手同士のコミュニケーションを見て、クイックの意志がないのであれば、自分のポジショニング確保の意味でも一度試合を止めることも必要であった。

全体ミーティング(場所:クラブハウス)

◎負傷者対応

負傷者が出て役員や担架が必要な際に 4th とのコミュニケーションが取れず、対応が遅れてしまう場面が多々あった。

→試合前の打ち合わせで入念にお願いしておくこと。役員を呼ぶ前に担架を要求した際に役員はどうするのか。

→4th だけでは対応が難しい時の A1 の協力

→ジェスチャーは「大きく・ゆっくり・はっきり」と。レフェリーの存在意義をしっかりと示す。

◎オフサイド

今大会を通して、オフサイドの旗が上がった際に笛が鳴る前にプレーが止まる傾向にあった。笛が鳴るまでプレーを続けて欲しいという印象。特に only の場面でそのようなことが目立ったため、審判目線でどのように改善すべきか討論した。

→確実な only の場面では早めにとってあげた方が良いのではないか。

もしキャンセルするのであれば、「続けましょう」などの声掛けがあると親切。

◎協力

・再開方法・場所の協力

A1 が反対側サイドペナ内の再開方法が違うことに気が付いていたものの、確信が持てず伝えることなく、間違えた再開方法で再開してしまった。

→遠いからこそ全体の監視を行うことが出来る。1%でも違和感があったら必ず伝える。伝える際は、まず声やジェスチャー、気が付かないようなら自分から行動してみることも大切。

→ファウルサポート

主審が副審に確認する際のポイント 3 点

① ファウルかどうか ②カードの有無 ③再開方法・場所

◎自由な交代

今大会は、交代に制限がなく自由な交代が認められていたため、4th が慌ててしまう場面が見受けられた。

→打ち合わせの際に落ち着いて丁寧に行うよう伝えることで少しはやりやすいと考えた。また交代の際の A1 の協力は非常に重要である。

18日(土) ③1次リーグ・④2次リーグ(1位リーグ)

③ Legame vs SOCIOS. FC. VENGA (時之栖スポーツセンター裾野グラウンドCピッチ)

11:00 Kick Off

結果: 0-1(0-0)(0-1)

R: 友宗菜月 A1: 秋山心音

A2: 後藤潤 第4審判: 富永華

担当INS: 浅井昭子氏



<自分の振り返り>

この日は雨天だったためピッチの状況が非常に悪かった。後半9分、両チームの選手がボールに対してチャレンジしたところ足を滑らせ転倒した拍子に Legame の選手が後頭部を地面に強く打ち付け、会話もできない状況だった。主審の素早い対応により役員・担架をすぐに入れた。その際に 4th に代わってベンチや全体の監視に努めた。ドクターの判断により救急車で搬送されることになった。主審が試合を一度中断したが、その他の審判には伝わっておらず、時間管理の面で全員で共有することが出来なかった。再開方法・場所はしっかりとコミュニケーションを取り、間違いなく行うことが出来た。

<INS からのアドバイス>

試合を中断した際の時間管理の認識が間違っていた。結果的にタイムラグは無かったが、もう一度全員で確認する必要がある。

④ おいでやす京都 vs シュピーニ大阪 (時之栖スポーツセンター裾野グラウンド C ピッチ)

15:30 Kick Off

結果: 0-1(0-0)(0-1)

R: 秋山心音 A1: 友宗菜月

A2: 富永華 第4審判: 後藤潤

担当INS: 浅井昭子氏



<自分の振り返り>

いずれの判定に対してもリアクションの多い両チームであったが、オフサイド判定に対して強く副審にアピールした選手がいた。納得がいかないだけだと捉え、注意は必要ないとその場では判断した。しかしその直後のオフサイドを取った際に、選手やベンチから多くの声上がりその場の状況を考え、一度副審の元へ確認しに行った。判定は戻りオフサイドと確認し、状況を全体に伝えその場を収めた。しかし振り返ってみると1つ前の場面でリアクションがあった選手に対して対応することで、選手のメンタルコントロールができたのではないかと感じた。また状況を伝えた際に、伝える対象・伝え方がベストだったのか自分

の中で疑問が残った。様々な方の意見を聞くことで引き出しを増やしていきたい。

ベンチ側レフェリースイドのタッチジャッジに自信を持てなかった。リスクはあるが、説得力のあるポジショニングをとるためにはタッチラインを出たポジショニングにもチャレンジしてみたいと思った。

<INSからのアドバイス>

球際を競い合った後のちょっとしたファウルを見えているのにあえて取らないのならば、アドバンテージまでいかなくでも続けて欲しいという意思を声に出して伝える必要があった。また、そのようにすることでレフェリーは見ているよという安心感にも繋がる。

後半、説得力のあるポジショニングをとるため、自らチャレンジしていたことは非常に良かった。多くの事に挑戦し、自分に合ったレフェリングに努めてほしい。

全体ミーティング(場所:クラブハウス)

◎コーナー付近スローイン時の副審の立ち位置

・監視しなくてはいけないもの

→スローワーカーの足元。

・体の向き

→ゴールラインよりも前に投げることはないため、ゴールラインに立ちピッチ全体に体を向ける。



◎判定に対しての過度なリアクションをする選手に対する対応

・伝える対象

① 反則を犯した選手のみ

→一番納得がいていないのはその選手。周りは乗っかっているだけでは。その選手自身が納得したら周りも納得する。

② 寄ってくる選手数名

→聞きに来ているなら話してあげるべき。

・伝え方

① 确实見えていたならば副審がその場で声を用いて伝える

→あえて時間を取らなくて済むため、円滑に進めることが出来る。

② 対象の選手を呼び、状況を伝える。納得してくれたら「判定のレスpektありがとう」と笑顔で感謝する。

→選手の盛り上がった感情を抑えることが出来る。

③ 対象の選手のプレーを肯定する。その後、判定がこうであると伝える。

→一度「ナイスプレーだった」と認め、でも惜しかったという選手を否定しないことで

気分よく納得してくれる可能性が高くなる。

⇒様々な意見があるが、まずはその他の審判を守ることが出来るのは“主審しかいない”という意識を忘れてはいけない。その意識を持つことで対応が変わってくる。

◎コーナー時の主審のポジショニング

→コーナー以外の場面も同様、「自分は何を見たいからここにいる」と自分のなりの考えを持つことが重要。またそのポジションを取るもののリスクやそれを回避する対処法も同時に理解しておく必要がある。

19日(日) ⑤⑥2次リーグ

◎リトルスターズ vs Legame (時之栖スポーツセンター裾野グラウンド E1 ピッチ)

9:30 Kick Off

結果：0-0(0-0)(0-1)

R：秋山心音 A1：勝又芳秋

A2：土屋静一郎 第4審判：別府朋香

担当 INS：山岸佐知子氏

<自分の振り返り>



この試合は、選手との信頼関係を築くことを意識して取り組んだ。大会最終日だったため、選手の疲労も考え負傷者には特に気を配った。ノーファウルの接触やオフサイド判定に関しても、2日間の反省を活かし声でプレーを続けさせることが出来た。

早いスピード感が不必要な場面でトップスピードで走ってしまったため、もし何か起きた時に正しく見ることが出来なかったのではと感じた。フォーカスして見たい事象はスピードを落として見る事の出来るよう、ポジションの先取りに努めていきたい。

前半アシスタントサイドのファウルの監視を副審に任せきりになってしまっていたため、後半は意識的に距離や角度を気にかけた。

<INSからのアドバイス>

ペナルティーエリア付近で何か起こりそうなときに争点に対しての入り方、動き出し方を変えるだけでもっと説得力のあるポジションを取ることが出来る。負傷者によく気が付き、声をかけるなど選手を思い続ける心は続けていくべき。ただ気にかける反面、プレーの監視を怠らないよう気を付ける。ピッチの中央付近で自分に向かってくる選手をバックステップで逃げるのではなく、体を45度回転させる方が次のプレーに繋がりやすい。

◎ENSOWA KUMAMOTO vs FCマミーズ (時之栖スポーツセンター裾野グラウンド E1 ピッチ)

11:00 Kick Off

結果：1-1(0-0)(1-1) PK：4-3

R：別府朋香 A1：勝又芳秋 A2：縄田俊 第4 審判：秋山心音

担当 INS：西野佐知子氏

<自分の振り返り>

試合前やハーフタイムに担架要員の方々とコミュニケーションを取ることで、担架が必要な場面で迅速に対応して頂くことが出来た。ベンチへ軽い注意が必要な場面でも“お願い”という形で言葉遣いや伝え方を気にすることで、ベンチと良い関係性を築くことが出来た。自由な交代で複数人交代があっても、今までの4thの経験を活かし落ち着いて取り組み、選手に対する些細な声掛けで選手とのコミュニケーションも図ることが出来た。

<INSからのアドバイス>

ベンチや試合だけでなく、担架要員にも気を配っていて非常に良かった。このようなコミュニケーションがあったことで、担架要員に入って下さった静岡県の方々も気持ちを切らさず対応してくれた。今後も続けて欲しい。

研修を通して

今回は、初めて全国研修・大会に参加させて頂きました。まずはこの研修会に北海道代表として私を推薦していただいたことを深く感謝いたします。また、北海道でサッカーをするにはまだまだ難しい3月のこの時期にサッカーができる環境であることを非常に嬉しく感じると共に、新型コロナウイルス感染症への不安が完全には消えていない状況で安全に大会を運営して下さった静岡県サッカー協会の皆様にも感謝申し上げます。

今大会はO-30の大会ということもあり、多くのチームは「エンジョイ」の雰囲気だった印象です。しかし各地区の予選を勝ち抜いてきたチームのため、ボールタッチや走力など全てのスキルにおいて高いレベルの大会でした。

今回の研修会での目標は、INS山岸氏による“try and error”という言葉のもと、挑戦と失敗を繰り返して成長していこうというものでした。特に、「負傷者対応(頭部)・協力・争点に対しての角度」という部分について取り組みました。初めての全国という舞台で不安に感じることは多々ありましたが、このようなチャンスをプラスに捉え、多くのことにチャレンジし吸収することが出来ました。

普段は中々出会うことの出来ない同世代の女子審判員と、全国研修という場を通じて共に活動できたことや、経験の浅い女子審判員ならではの悩みを共有し合うことで、今後の活動への不安を減らすことが出来ました。沢山の素敵な仲間が出来たこと、非常に嬉しく感じます。

今回の経験を通じて自分の新たな強みや課題に気が付くことが出来ました。今後の活動を通して更なるスキルアップに努めていきたいと思えます。改めて今回の研修会に私が参加させていただくにあたって、ご尽力いただいたすべての方々にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

